

モーツァルト室内管弦楽団 第179回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester Japan / 179.Regulärkonzert

〈ベートーヴェン・シリーズ〉その7 (最終回)

2017年12月3日(日)午後2時■いずみホール

Sonntag, 3. Dezember, 2017 14Uhr Izumi Hall Osaka

- 主催:NPO法人モーツァルト室内管弦楽団 <http://www.moz-kam.org>
- 協賛:いずみホール[一般財団法人 住友生命福祉文化財団]
- マネジメント:大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

*本年2月モーツァルト室内管弦楽団はNPO法人となりました。



Program

モーツァルト室内管弦楽団 第179回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester Japan / 179.Regulärkonzert

2017年12月3日(日)午後2時●いずみホール

Sonntag, 3. Dezember, 2017 14Uhr Izumi Hall Osaka

〈ベートーヴェン・シリーズ〉その7 (最終回)



ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven

(1770-1827)

序曲《レオノーレ》第3番 作品72b

Ouvertüre Nr.3 zur Oper „Leonore“ op.72b

Adagio — Allegro

交響曲 第9番 二短調 作品125 《合唱付き》

Sinfonie Nr.9 d-moll op.125 mit Schlusschor über Schillers Ode “An de Freude”

- I. Allegro non troppo, un poco maestoso
- II. Molto vivace
- III. Adagio molto e cantabile
- IV. Presto

ソプラノ：西垣千賀子 / Sopran : Chikako Nishigaki

アルト：福嶋あかね / Alt : Akane Fukushima

テノール：西垣 俊朗 / Tenor : Toshiro Nishigaki

バリトン：田中 勉 / Bariton : Tsutomu Tanaka

合唱：モーツァルト記念合唱団 / Chor : Mozart Choral Ensemble

合唱指揮：益子 務 / Chordirigent : Tsutomu Masuko

コンサートマスター：釋 伸司 / Konzertmeister : Shinji Shaku

指揮：門 良一 / Dirigent : Ryoichi Kado

■初めての《第九》

『何を隠そう、《第九》が嫌いである。ベートーヴェンは生涯の終わり近くになってこんな曲を書いて晩節を汚したと思っている。彼は同じ頃に非常に難解な弦楽四重奏曲をいくつか書いたが、その一方でこの《第九》によって「大衆化路線」とでもいうべき道を開いた。そのもくろみは150年ほど後になって極東の一島国で大成功を収めるのである。今やこの国では年末ともなれば《第九》なしでは夜も明けないほどになっている。・・・』

この文章は、今から7年前に〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開始することを決意した、ということはシリーズの最後には《第九》を演奏することを決意したということだが、その時に《第九》の演奏会のプログラムノートにはこう書くと思った文章の書きだしである。皮肉っぽい、若干否定的な書き方は当時の私のベートーヴェン観をよく表している。

今やシリーズを終えるにあたって私のベートーヴェン観は全く違ったものになっている。ベートーヴェンのすごさはもちろん以前からよくわかっていたつもりだが、ハイドンとモーツァルトをかなりやり、ベートーヴェンの作品をある程度系統的に演奏した今となっては、彼の偉大さを遅まきながら再認識せざるを得ない。全く「すごい」の一語に尽きるのである。

シリーズを始めた時期の私の上記のベートーヴェン観がどのように形成されたかを説明したい。モーツァルト室内管弦楽団を創立した当時(50年ほど前)は、オーケストラの演目はプロモアマもベートーヴェンの交響曲が中心で他にはチャイコフスキーやブラームスといったところが主であった。いずれも演奏にパワーを必要とする音楽である。その当時は日本のプロのオーケストラもいわば発展途上段階だったので、それらの演目を力まかせに荒っぽく弾いていた。モーツァルトやハイドンの演奏にもその影響が及んでいたのである。私は当時のそのような演奏傾向に強く反発し、モーツァルトやハイドンはもともと宮廷音楽であって、ベートーヴェン以後の音楽とは本質的に異なっている、演奏法も変えなければいけない、という主張を持ったのであった。モーツァルト室内管弦楽団の演奏方針は、楽譜の隅々まで正確に丁寧に弾き、優美で繊細な表現を目指すというものであった(今日でもそれは変わっていない)。そういった演奏法は当時は珍しかったらしく、「K響よりいい」とか「Dフィルよりうまい」などとよく言われたものである。

それはともかく、その後日本のオーケストラは急速にうまくなり、今や世界的レベルに達していると言えよう。明治時代の輸入以来150年近くが経過し、西洋音楽の演奏のノウハウが周知徹底された結果であろう。数十年前までは日本のオーケストラの常任としてヨーロッパのいわば「下振り指揮者」が着任し、もっぱら音楽の基礎訓練を行ったことなど遠い昔に思える。

〈ベートーヴェン・シリーズ〉に話を戻そう。このシリーズを始めたのは、〈ウィーン古典派〉を形成するハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンのうち、ベートーヴェンだけを敬遠するのはおかしい、ハイドン、モーツァルトの後継者としてのベートーヴェンをとらえ直す必要があるのではないかという理由からであった。今日ではベートーヴェンを第1ヴァイオリンが16人もいるいわゆるシンフォニー・オーケストラで演奏するのが普通になっているが、それも再検討の余地がある。ベートーヴェンの時代の常設的なオーケストラがいったい何人の編成だったのか、議論の分かれるとこ

ろであろうが、彼の基本的スタイルである標準2管編成(フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット各2本にティンパニ1対)と釣り合いの取れる弦楽器の人数を想定すべきであろう。モーツァルト室内管弦楽団の通常の弦楽器編成は、第1ヴァイオリン6〜8、第2ヴァイオリン6、ヴィオラ4、チェロ4、コントラバス2〜3であるが、これが上記の標準2管編成と最もよくバランスするのではないかと信ずる。つまりハイドン、モーツァルトを演奏するのと同じ規模でよいわけである。またそれでこそハイドン、モーツァルトの後継者としてベートーヴェンをとらえ直す意味が明瞭になる。

さて、シリーズが進んでついに今回が最終回となったわけだが、上述した楽団の基本的演奏方針である「楽譜の隅々まで正確に丁寧に弾く」というスタイルが評価されたのか好評を得ているのはうれしいことである。そのような演奏スタイルは優秀なメンバーで構成された室内オーケストラによってのみ実現できると信じている。われわれもベートーヴェンのすばらしさをあらためて認識し直すよい機会となった。ベートーヴェンは先輩のハイドン、モーツァルトの作り上げた様式から「異常」といいほど大きくはみだしているが、これは時代の変化もあるがそれよりはベートーヴェン自身の個性の強さによるものであろう。だが彼の音楽の形式そのものは二人の先輩のそれを巧妙に引き継いでおり、まさに「古典派」の最後の役者にふさわしい。

実はモーツァルト室内管弦楽団が《第九》を演奏するのは今回が創立以来初めてなのである。年末ともなれば競って《第九》を演奏する楽団が多い中でまさに貴重な存在であろう。かく言う私も《第九》を振るのはまだ2回目なのである。こんな指揮者は日本中にいないのではないだろうか。数多い《第九》の演奏の中で何か他と違う新鮮な響きを出せれば望外の喜びである。

■序曲《レオノーレ》第3番

ベートーヴェン唯一のオペラ《フィデリオ》は1804年(34歳)に作曲が始められ、翌年に初演されたが不評で、その後2回の改訂を重ねて1814年に再演されようやく成功を収めた。レオノーレとはこのオペラの女主人公の名で、男装してフィデリオと名乗り、囚われている夫を救い出す役柄である。当初このオペラは《レオノーレ》と名付けられていた。ベートーヴェンはこのオペラのために序曲を4つも作ったが、序曲《レオノーレ》第3番と呼ばれる今日演奏する曲が一番出来がよく、規模も大きい。現在はオペラ上演の際、第2幕で演奏されるのが慣例となっている。オペラの内容をよく表した傑作であり、途中で囚人を救う大臣の到着を告げるラッパが舞台裏で2度鳴るのが有名である。(2014年5月31日開催の第158回定期演奏会〈ベートーヴェン・シリーズ〉第4回のプログラムノートより)

■交響曲 第9番 二短調 作品125《合唱付き》

1822〜24年(52〜54歳)に作曲されたベートーヴェン最後の交響曲。前作の第8番より約10年の隔りがある。第4楽章には合唱が加わり、シラー(Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805)の賛歌「歓喜の歌(Ode an die Freude)」が歌われる。合唱が交響曲に用いられるのは初めての試みであり、後のベルリオーズ、メンデルスゾーン、マーラー等に大きな影響を与えた。同じ頃の作品には弦楽四重奏曲第12〜16番、大フーガ、荘厳ミサ曲などがある。

Profile



西垣千賀子 ●ソプラノ Chikako Nishigaki, Soprano

大阪音楽大学声楽科卒業。関西二期会公演「利口な女狐の物語」でデビュー。以後、「ルクレーシア」「魔笛」「コジ・ファン・トゥッテ」「ヘンゼルとグレーテル」「ドン・ジョヴァンニ」「後宮よりの逃走」「フィガロの結婚」「椿姫」「蝶々夫人」「こうもり」「メリー・ウイドウ」、日本オペラでは「よさこい節」「曾根崎心中」「出雲の阿国」「国性爺合戦」「天守物語」「金閣寺」「千姫」「夕鶴」等数多くの舞台でヒロインを好演。また宗教曲においても、ソリストとして幅広い演奏活動を行う。永井和子氏に師事。平成9年度神戸市文化奨励賞受賞。関西二期会、神戸音楽家協会、神戸波の会各会員。女声合唱団4団体を指導。

福嶋あかね ●アルト Akane Fukushima, Alt

滋賀県立石山高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学卒業、京都市立芸術大学大学院首席修了。大学院賞受賞。村地保彦、手島孝教、蔵田裕行の諸氏に師事。2000年十東尚宏指揮・びわ湖ホール「メサイア」にてデビュー後、様々な舞台や演奏会にソリストとして活躍する他、神戸市混声合唱団、ヴォーカルアンサンブルKyoto(2012年度パロックザール賞受賞)などにも所属し、演奏活動を行う。現在、滋賀県立石山高等学校音楽科講師。京都女子大学講師。フリーランスで多数の演奏会に出演する他、関西各地の教育機関や合唱団で指揮・指導・編曲にも携わる等、幅広く活動している。



西垣俊朗 ●テノール Toshiro Nishigaki, Tenor

大阪音楽大学大学院修了。在学中よりカンタータオラトリオの演奏には欠かせないコンサート歌手として活躍。特にバッハの「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」等のエヴァンゲリスト歌いとして高く評価されている。オペラでは東京オペラ・プロデュース公演のロッシェニ「オーリー伯爵」でデビュー、その後、ロッシェニをはじめモーツァルトの五大オペラすべての主役に出演。日本のオペラも多数出演しており、キャラクターのある役作りの演唱で活躍している。昭和59年度神戸市文化奨励賞受賞。平成6年度兵庫県芸術奨励賞受賞。浦山弘三、エルンスト・ヘフリガー両氏に師事。関西二期会常任理事。大阪音楽大学講師。

田中 勉 ●バリトン Tsutomu Tnaka, Bariton

大阪音楽大学大学院歌劇専攻修了。文化庁芸術家在外派遣研修員としてウィーン国立音楽大学に留学。第1回JSG国際歌曲コンクール入選聴衆特別賞、第22回なにわ芸術祭新人奨励賞、大阪府和泉市文化功労賞、大阪舞台芸術賞本賞受賞。その卓越した美声と演唱は揺るぎなく、関西歌劇団オペラ公演では度々文化庁芸術祭優秀賞を受賞。大阪音楽大学教授、同大学院声楽研究室主任、関西歌劇団理事。日本シューベルト協会会員。



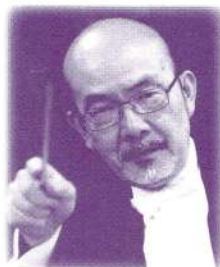
モーツァルト記念合唱団 Mozart Choral Ensemble (合唱指揮：益子 務 Chordirigent : Tsutomu Masuko)

1991年にモーツァルト室内管弦楽団の要請を受け特別編成された合唱団。女声は若手プロを中心に、男声は合唱王国関西の著名合唱団の指揮者、パートリーダーに参加を要請、1991年7月に益子務氏の指揮のもと発足、同年12月モーツァルト没後200年を記念してモーツァルト室内管弦楽団第48回定期演奏会でモーツァルトの「レクイエム」を協演後、毎年協演を重ねる。93年初の単独自主公演でジャンヌ・ワグナー氏を客演指揮者に迎え、「ロジェ・ワグナー・メモリアルコンサート」を開催。98、2000年ベルギー・フランドル政府の招きで文化交流使節として2度にわたりベルギー演奏旅行を行い、ブリュッセルのサン・ミッシェル大聖堂での演奏、FM-3での放送などで大成功を収めた。2000年設立10周年記念にCD「ロッシェニ小莊厳ミサ」をリリース。2010年には神戸で行われた日本音楽療法学会での大会長公演、2011年モーツァルト室内管弦楽団との合唱団創立20周年記念コンサートに引き続き、2012年には合唱団の自主公演として20年の歩みを記念したコンサートをいづみホールで開催。今年25周年を迎えるにあたり、「日本—ベルギー国交樹立150周年記念」コンサートを開催後、「ベルギー—日本国交樹立150周年行事」としてベルギー、アールステ市(聖マルティヌス教会)、アントワープ市(聖パーフス大聖堂)にてクリスマス大ミサを演奏旅行。

ソプラノ	島谷 陽子 松井 ひとみ	銭田 美幸 御池あゆみ	田中 薫 山本 真紀	友金 郁子 渡邊 智子	中田 佳代	平芳真寿美
アルト	以倉安希子 中口真由美	井村 園子 中根 佳江	大矢喜久子 林 理恵	古結 洋子 森田 裕子	佐野 康子	外山 有香
テナー	スガアルトソング 吉田 均	岡本 弘信	桑田 明和	近藤 達夫	陶山 悟嗣	前山 典彦
バス	小島 博 米岡 実	二階堂哲雄 渡邊 守	野村 透	秦 大	林 龍太郎	ピーター・フィンケ
練習ピアノ	植松さやか					

門 良一 ● 指揮 Ryoichi Kado, Dirigent

1939年大阪生まれ。1962年京都大学理学部物理学科卒業、67年同大学院終了。京都大学オーケストラには学部、大学院を通じて10年間在籍し、フルート奏者、指揮者を務め、同オーケストラの発展に多大な貢献をする。また、客演指揮者の故近衛秀麿、故朝比奈隆、故岩城宏之、故若杉 弘、故奥田道昭、秋山和慶各氏等のもとで副指揮者を務め、薫陶を受ける。70年モーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり、同楽団を日本有数のプロ室内オーケストラに育て上げた。モーツァルト、ハイドン等の古典派の作品を35人の室内オーケストラで優雅に繊細に演奏する独自のスタイルを確立している。企画力にも優れ、モーツァルトの「予約演奏会の再現」やオペラ《イドメネオ》の世界初ノーカット上演などの大きな企画を成功させている。また、世界的名手との協演も多く、ピアノのマリア・ジョアオ・ピリス、シプリアン・カツァリス、ヴァイオリンのライナー・キュッヒル、ホルンのペーター・ダム等との協演においてはソリストの絶大な信頼を得て大成功を収めている。近年は古典派だけでなく前期ロマン派やフランス音楽においても、企画、演奏両面で注目すべき成果を上げている。アマチュアの指導にも熱意を持ち、京都産業大学神山交響楽団の音楽監督・常任指揮者を創立時より務めている。モーツァルト研究者として知られ、1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにおいて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。



● NPO法人モーツァルト室内管弦楽団 Mozart-Kammerorchester Japan

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、47年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シプリアン・カツァリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シテオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を開催。また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を、15年からは〈創立45周年シリーズ〉を開始している。本年2月NPO法人となる。

《メンバー》	コンサートマスター	釋 伸司						
第1ヴァイオリン	釋 伸司	本多 智子	稲庭真理子	北村 奈美	松本 紗希	大西 秀朋		
	森住 憲一							
第2ヴァイオリン	中川 敦史	金 有里	田原口安代	徳田 雅子	幣 晴代	清水めぐみ		
ヴィオラ	道幸 明美	上野 亮子	三上 哲	白木原有子				
チェロ	山岸 孝教	石 豊久	大西 泰徳	三宅 香織				
コントラバス	石川 徹	土屋 綾子	松本 友樹					
フルート	大江 浩志	廣永 美優						
ピッコロ	本庄ちひろ							
オーボエ	中江 暁子	福盛 貴恵						
クラリネット	高橋 博	上田 浩子						
ファゴット	佐伯 利之	倉永 晴美						
コントラファゴット	羽生 尚代							
ホルン	水無瀬一成	小坂 智美	佐藤 明美	垣本奈緒子				
トランペット	大西 由起	中島 真	森下 智稔					
トロンボーン	鈴木 智	松田 洋介	寺谷 糧					
ティンパニ	泉 純太郎							
打楽器	小野 聡子	坂之上 篤	竹田 淳起					
インスペクター	中川 敦史							
ライブラリアン	本多 智子							

会長 谷口 安平 (京都大学名誉教授)
 監事 玉井 英二 (三井住友カード特別顧問)
 顧問 伊藤 郁太郎 (大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長) 梅原 猛 (国際日本文化研究センター顧問)
 (50音順)

《法人会員》(50音順)

荒川化学工業	三 孝 社	ダイキン工業	福 山 製 紙
関西電力	サンリーホールディングス	高 松 建 設	マ キ 工 業
きん で ん	新 日 鐵 住 金	中 西 金 属 工 業	三 井 住 友 カ ー ド
小 林 製 薬	住 友 生 命 保 険	羽 車	三 井 住 友 銀 行
阪 野 商 店	住 友 倉 庫	林 六	

《個人会員》(入会順・敬称略)

深 田 晴 世	日 高 穂	小 山 浩	井 狩 彌 介	小 早 川 清
福 岡 隆 子	藤 馬 啓 助	野 原 秀 純	井 井 狩 彌 介	金 岡 幸 惠
梅 原 本 一	場 野 和 子	松 井 基 香	原 村 東 増	西 野 勇 信
岸 田 村 博	田 名 孝 夫	道 隆 清 典	関 曾 我	久 木 山 西
屋 友 正 千	光 杉 島 田 成	壽 郁 鉄 尊	曾 我 瀬 阪	中 西 規 律 委
稲 垣 田 俊	高 川 豊 切	富 久 真 良	筑 苧 笠 近	濱 上 奥 野
浮 桑 三 三	神 杉 野 今	義 雄 久 洋	宇 高 後 島	奥 野 田 田
水 浦 島 边	玉 橋 有 佐	久 美 子 司	青 那 国 文	野 田 田 江
渡 川 藤 部	小 田 島 松	一 英 好 啓	富 森 笠 米	東 三 早 久
平 安 阿 中	柳 中 村 井	美 津 二 明	土 富 森 笠 米	宅 山 山 野
村 松 笹 緒	田 谷 田 田	子 郎 六 繁	太 富 森 笠 米	早 山 山 野
笹 緒 確 長	田 谷 田 田	郎 六 繁 登	太 富 森 笠 米	早 山 山 野
岸 能 官 祐	田 谷 田 田	郎 六 繁 登 弘	太 富 森 笠 米	早 山 山 野
金 金 菅	田 谷 田 田	郎 六 繁 登 弘 次	太 富 森 笠 米	早 山 山 野
	田 谷 田 田	郎 六 繁 登 弘 次	太 富 森 笠 米	早 山 山 野

- 会 費 ・ 個人会員につきましては年会費1口2万円です。 ・法人会員につきましては年会費1口10万円です。
- 会員の特典 ・ 年間6回の自主公演にご招待致します。(1口につき個人各1枚、法人各5枚)
- ・ ご同伴者は10%割引となります。
 - ・ 関連演奏会のご案内またはご優待を致します。
 - ・ 定期演奏会プログラムにご芳名を記載させていただきます。
 - ・ 会報「ディヴェルティメント」をお送り致します。